へ 遠 特13
991
2

遠門
號991
巻2

天狗藝術論巻二

一一切の藝術放下つゝ茶碗回しかいてこそ
すべて事乃修練ふ事上手なれどい
ずれも奇妙をはこれ気を以て天地
太なる日月星辰物は生殺をなすものの
往来しく変化をもつて妙用をなす言
これ陰陽の変化の理なり
説の尽せ所ふ中ふ中ふ
ても気なる以て生を遂ぶ気ハ生乃み
なもとなり此気ハ時々

死は生死乃際ハ此気さん変化して生さん
原なしゝ所時を死の終所故知所生死
の乃ゝ明このあるゝ知幽冥鬼神通しゝく
一ッなるがゆへ今日身を立て後生
ゝ在て自在なれて死ゝあれども自在なる
佛家ゝは再生流転の慣習なりかゝるゆへ
て造化を以て幻妄ゝゝ云故形識を
去て不去不生の文ゝ故以成佛と
は聖人ゝ学ハ再生輪廻乃おそれなし化
ゝ棄ゝゝ尽ゝ帰はゝの〳〵気故終を

ゝと知ハおのゝ〳〵心故ゝ
一生死の理を考りやきゝ不あれども此生に考ぐ
らゝれ名ゝ乃ゝ見故迷心ゝゝゝこの迷妄
動すゝ有て神ゝ〳〵ん〳〵常ゝ大負故と
はゝこゝ故考ゝは
一向ゝ極則よおいゝくハゝ家ゝゝゝゝ学べゝは孫ハ
くハ修行の大器故学む
日道ハ見べゝは少面ゝ考ゝ多〳〵ゝ少
べき者ハ乃れ法ゝりゝ法ゝゝて法ゝ
き不故悟ゝ見故自ゝ〳〵ゝ学ハ自ゝゝあ

されハ用なきさゝ劔術小藝なりといへとも神
のぬ用みてもなほ乃ん乃と合れ我い
まゝ自ほいゝゝずといへともひそかに学こと
あるも少再なに以ちゝゝく汝ほ語ゝん汝ため
聴ちよ耳なに以て少ことなれ夫心を我て形を
滅ちるものハ気なり故に一身乃用も全く気
是なに掌ゝ体気乃壹是をんゝいふ天理を
具へゝく此気ふまるものなりん神もと形色
色なちゝ気ふ無しゝく用なれるものなり
上下に通ずる者ハ気なり僅ふ思ふこと有れハ

気ふ乃ち体心の物ふ觸ゝ動ゝ是なに感ずるといふ
思惟性なすゝ是なに念といふん感乃まにう
ごいゝく自性乃天刈ふ率ふとき八昊明始終を
契いて気れ動あ動ゝ北しゝとゝ八舟乃流まに従
ひゝく下ふゝゝ動ゝといへも弁静ふ
て動の法なり是なに動而毎動といふ凡人
生死乃迷根いまゝ改セれ常ふ限伏して壹
明乃蓋ちなる有て其怒哀楽ふ益の府
ハ頑元ふして濁水なに湛へるゝゝ一念
僅ふうこく時ハその限伏乃者起て情欲妄動

して我が良心に違背せざる逆上せざる舟を操るごとく彼あるいは舟動いて内安きとれし気高新する時は應用自在なる劍術は猪頁の事なり初学より生死乃迷根を断ち以て要とし然るに生死の迷根ふたつに断ずるは故に生死の理において心地尽し気地孫子猪頁の事に試るに此乃において工夫怠るべし殺身成仁して事熟気おさまり其理に徹しくるること疑れく此一路において靈明霊妙

不知とき八此念に動ずることなし此念動ぜざ則八気を靈明に帰し活達流切心を載く常にして否ることなく色を形を御することを得自在なる人は感に随く應用乃迷なる事を一切いく至る月乃さし入ごとく物に拍く至る声を應ずるがごとく猪頁八應用の法なり我に此念なり此八形に此相外相八念乃表れて形にあらざる者なり形にあらざる者なり欲するべきもの明らかに見て敬もれく我も知

いふ我あれハ数あるとハ我なれがあるゝ正ふ者
れ若悪邪正一念の微ふるるすて猶ふうるる
おのおのゝ我より見なうのきをみハあるべの
きすて移ふれゝ成徒れ人ふハ邪以て向ふ
こゝあるゝるぶゝ自然乃妙れと若
我より是拔稲さんとセバ此念ちり此念我を
宝ぐが有に乱滞て應用自在すべ不測
妙用思ゝ為ばゝ来徒神乃ゝくゝ乱れ
者を拔剣術悟入乃人とい
然も鼻ゝく耆あす翅あす故み他乃事に

おいゝハ昊明宝ふ取あるく心乃應用自在
拔あれこゝあるゝふ涙ふハ始より傍へふ此一法
ふ志ゝく心を涙ゝ乱拔猿事こゝにあるも
他の事ハ疾痛身ふ切なるゝ忘れ物耳ふぬ
ふれども眼を耳くゝ見るるれゝ次や心を留
むや故み此ふハ涙ゝ拔るて吟うるれも虞く取て他
ふ用ふゝあるゝべ明乃及平限あれゝふるゝ
ゝハ炊拔第の内ふ金て一方拔耳くゝちゝ
ゝ耳きゝる方ハ昭ゝゝゝ他ハ光ちゝゝ
むゝ他ふ通するゝあるゝハ光ハ傍光の新

なる故不全地なるあるべし初ハ力ある穴を
尺付てこそ充ぬ力を用ひくはるあるれハ海内
の力みて以来に充大くなりて照れ不と大地
為天地万物を以て折たり力と〳〵海内し此
第を打破〳〵八世界八面四方なりん神乃應
用世得自在みて富貴貧賤患難困苦此
大欲なる後大より取者といふとも一毫も
動念なく当ぬ以て蠅を拂ふごとくこれ
あて平伏〳〵以を出すことのあるべし
此ようなく鼻を平〳〵ふなり翅なくこれ死

内自在ぬなれへ
一徒て一義云ハ去〳〵ふ者ハ常にん故用ふ故
不乃理不ハ曉ものなり然も志一我義不
潔なる故不此に私〳〵乃ち入〳〵偶
学術を好む者あり〳〵といへども芸術故以て
〳〵学故以てあるとする故不此保留
みれ芸術ハ奴と成〳〵廣く用故あること
さらば没やん術を助ふこあんや義術故
修するもの此不故自得セハ日〳〵海する所の義
術我心故助ぎ〳〵さ故乃妙用故澄き

べし見よおいらく藝術もまた自在なるべし
然るに初より執する所乃一念執着に成者れば
学術藝術ともに只この私心をさへ去れば天下
我を動し者なくして應用世務自在なり
私心八金銀財貨妻妾情欲偽巧の類なれば
不善ばかりなれども一念ひるがへり執する所
あれば即私心なり必ず執すれば必ず心病成
小さ成大小執すれば大小作成少ず藝術小
道する者もこれ業乃上おいて八私心の己成
害すれこと明らかなるといへども度々心体

應用の向ふ試て志ある事如し心術成熟せ
体者といへども猶八頓悟を要す一念隠
微乃るハ終しげき成者なりん術成終す
れものしおもり藝術成熟するものも我な
ら此心ニりあれる所ゝ此と後すく熟
思もへし
一今事熟し元和し稽頁の利を試ゝ
こゝふこれく感ゝこれく神元ゝく自在
なるものお河しこと妙用神乃如しといへ
ども必ず特む所あることなる免ざれも

のハ弁人ハ能技を尽くし師乃天地の間
に死をしのぶ能兵法ハ上
といふ
一向如何しく今藝術技以て道学技助光
蒼心を性情のく性ハ心神ハ天理寂然不
動まして久し形色れし情乃動く而に
因て邪あつて正のり善あつて悪あつて情の変
化ましまして心神乃妙用技尽て天理人
欲共分て技しに是を学術といふ
是技知ハ何物ぞやすなわち自性乃霊光

己ハ奥のく欺くべからざる迷べからざる乃神
明是技知といふ世間ハ小知才覚をいふハ
あんぬ小知の才覚ハ意識乃あらはれ出る
ハ心乃知覚なり之滅し本霊明ハ因て
いでゝ情乃好悪ハ本性乃善悪なるこの故ま
みしまして邪あつて正のり善あつて悪のり遍
て好悪乃情技ゝすきく私乃ゝくみを
是技小知といふ自性神明の知ハ情ハ好悪
加ゝゝぎ純一みしてく理を照らして所
私なし故て善も悪も悪く唯明ゝ

なるのゝ云識是ふたつなく私乃巧を用
ひざるゝ故ふゝ情を制しゝく執滯なく心
体乃天然のまゝにむ情心神ふたつなく
て好悪の執滯なく恐懼の執念なき所ハこ
識神明ふ和ゝゝ知乃用なく此まゝ
て云識乃証なり是なく毋意といふこと
情欲なくひまゝゝ是がゝめふ巧をなし偽な
るゝ種ゝ情変ゝゝやまざれ所ハ我ゝん体
なく係結ゝゝ霊明なくなく故あ心や
ゝ化人ゝ情欲心乃ゝなるゝ有不ゝの

云あ心のゝめふ情動やゝ迷て霊ゝ神なく困ゝ
むふゝこゝなくゝゝゝ故ゆへ不学術ハ此云あの
惑なく拂ゝひ去ゝ心体乃天理なく通ゝ
霊明なく罪なくゝ天然ゝゝゝふゝ小なの他
為を用ることなく物ハゝものみ他ゝ物乃ゝ
めふ役ゝれゝゝ事ハ来れふ他ゝ求ふこと
もれゝ厭ゝゝもれゝ故ふ終日思惟ゝれゝ
私なくなゝ心なく累ゝれゝこゝなく終日事
よ労ゝれゝも神を困むゝゝれゝ今よ委
祢義乃決ゝゝゝゝゝふゝゝゝ好ゝ惑ふゝゝゝ

為心の誠をさゝく一毫を志しを曲ること
なく害なく敗ることなく小伎巧を用ひて利を
はかりほつゝく小知なる事とせん生ハ生に
きゝ勢てさて乃なく乃死ハ死ハ生ハ勢て
其帰なく安んじて天地変動すれども此なく
うゝ動くこれく万物掩ひ覆れども此なく
なく撓さゝることなく思ゝ執滞せざるして
ものむこれし心をたゝしを書ひ決然
として立く屈することなくおこることなれ
く悠然として居て動ることなく迫ること

とれく初学より此志しなく立く應接の
万耳目よふゝ下の者なく以んを例す所れ
ものとして理み大小れし劍術乃拙れ
もまこ此みるべ故にて藝術よおいく例を
所所乃業なく以て内よ省く日用常行
万に通ゝく心術なく沈ま藝術もまく内
小徹して相助事おき書ふて益大なる
へし例なより你きよ入甲なく踏てるな
よ登所先古へ芸術を以て道学なく助を
此なく例ゝく彼なく乃ゝ段なり其年

又十以上の人足のたるゝ処自在なれハ或ハ為
身又ハ公用ハ勝手ゝして手事なく務ふ
こゝあるさたハ武士の職なれ恐れ慎ひざる
もおのずから快うしべきもひる足ハ叶ふべ
〳〵ハ二ツハなくも此心乃二ツハ
ざる所を治せんとそこゝ論する所れ志
成之家人乃変ぜざる所なく成して生死
一要此理并ニ天地万物ハ得ふこの
ちゝハ床に外ふしをゝ用ハ勿論辻者
火の回り成勤めあゝも心ハ稲ふ所耳用

よりて所の物を以て打たんとして心の欲す
ハなすべきことなれ間暇あらバ藝術不達し
る人ハあらじ事なれ習ひそ始なゆえて
人ハ世に欲ハ命ハ人ハあるべき行末を
うき故なして死なん快くせんれ伊乃憂
ふこと人あん士るもの唯志しの折をざ
ル故事あれ形ハ去よあるを強弱ハ病
身あるを公用去事紀ものあり身ハ天れ
ハ身ハして家ハ私する所ハ唯志
ハ家ハあり天地鬼神も是故奪ハこと

あるべかるゆへ形ハ天ハ人ハ所ハ
て家を我こ病さ故ハ小人ハ天の
ハ故悲家する所を努ル天の所ハ
家知力乃おそさ体ハるを知力ハ及ざ
れハ故うるいこと家を神をくるむハ
のハ愚れを
向家ハ多子あり年いまぐ長セル劔術故終
するこめ何して可ちむ
曰古ハ洒掃應對ハ藝ハ遊むぐのち
大学に入るん術故あるル孔門乃法賢

をうれ六藝云て出して通学故沈する人多
年いまゝ出せ八しゝ事理小通達する役ゝ
力れな者ハ小知を先みせ佛みちゝ行て
当世用ハ足不として事故努めゝ足のゝ
ゝ紀を習ゝ筋骨を強ふしゝそ上みて
元を殊ゝ人故終しゝそ拙分を覗ふへし
是終れ八席好ゝ二ツ柴れ本ハ柱小用ゐ
べゝ八た添本故をゝ曲ゝざる係よゝ
面しゝ幼年のゝゝめより志し邪に往し
むゝ八志邪ハゆゝされハ戯拙乃事少い

ゝも邪なれものゝり心邪なれ附ハ正故宮
するものれし天地の百用故なきゝれものゝれ
ゝり邪を以て宮まるゝゝゆへて性故備ふ
て用をなきゝ人心をと不善れし唯有生れ
ゝゝめゝりて邪故以て書ふ有小世弱
して志ゝ自性故宮して不善ハ隔ハ邪ハ
人欲是ゝ根とゝれ小人ハゝおのゝ故利する
故以ゝ心とする故て己ハ利あれハ邪なき
ゝも邪を志ゝ己み利あゝされハ正なれ世
を正故志ゝれし行ゝを邪正をワ

きまへちゑ次やもよりく分るをなきん
や故に学術ハ人欲乃高動を抑へ心体天理
の妙用を見て形正の曲てワるを正を審ふ
しを高心乃形なきりそけ自性ハ本体な
宮すれことれなのく天へ上ることもあ
ぜ地を潜ふことあもあ〳〵形きりそく時ハ
天理ひ〳〵あ〳〵ことれ形よ〳〵きりそけハ
て理ゆ〳〵ハ〳〵ハ是大ふ退ゆハ大ふあ〳〵
ハふみけう〳〵心よ試〳〵れへ〳〵剣術も亦
先ゆをそ〳〵初学より何乃弁へきるゆも
なく学んみて事自然ゆ應し柔なゆて
剛なゆ制を事ハ末なりといひく頑を堕
氣よりく足ゆをのをなきりずんは
現世後生ともに取失ふ事

天狗藝術論巻二終